

河内町埋蔵文化財調査報告書第1集

日枝神社南遺跡・日枝神社南古墳  
発掘調査報告書

1997

河内町教育委員会

# 日枝神社南遺跡・日枝神社南古墳

河内町教育委員会

## はじめに

河内町は、栃木県の中央にあり、県都宇都宮市の北10kmに位置し、町の東に一級河川の鬼怒川が流れています。地形的には西部が丘陵地で中央部から東部にかけては平坦地になっています。

河内町には52ヶ所の周知の遺跡があり、今回調査した所はその中の一つである日枝神社南遺跡・日枝神社南古墳であります。また、この調査は河内町にとって初めての遺跡発掘調査であり、発掘調査にあたりまして御指導、御協力いただきました石川先生をはじめ、多くの関係者の皆様には感謝いたしますとともに今後の御協力をお願い申し上げあいさつの言葉いたします。

平成 9 年 9 月

河内町教育委員会

教育長 和田 實

# 例 言

1. 本書は、栃木県河内郡河内町大字下岡本4017番地に所在した日枝神社南遺跡および日枝神社南古墳「県No.2575日枝神社南古墳」（栃木県教育委員会『栃木県文化財地図』1985）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は河内町教育委員会が、平成元年6月8日から同年6月25日まで実施した。出土遺物等の整理と報告書作成は平成4年度に実施した。しかし、諸般の事情により報告書の刊行は平成9年度になった。
3. 本書の執筆、図面作成、石器の実測等は、調査を担当した石川均が行った。
4. 本書に収録した資料は、すべて河内町教育委員会社会教育課で保管している。
5. 発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々から御指導、御協力を得た。記して厚く御礼申し上げる次第である。

後藤信祐、中山 晋、五月女哲郎、栃木県教育委員会文化課、栃木県文化振興事業団、  
河内町文化財保護審議会委員

# 目 次

はじめに

例 言

I 調査経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法	1
3. 調査日誌抄	2
II 地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III 検出された遺構と遺物	6
1. SD-01と出土遺物	6
2. SD-02と出土遺物	10
3. 経塚と出土遺物	10
4. グリッド出土遺物	15
IV ま と め	17



## 挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図	3	第7図	SD-02実測図(1)	11
第2図	周辺の地形及び遺跡分布図	4	第8図	SD-02実測図(2)	12
第3図	遺構確認状態図	7	第9図	経塚セクション図	13
第4図	SD-01実測図(1)	8	第10図	五輪塔実測図	14
第5図	SD-01実測図(2)	9	第11図	グリッド出土土器実測図	15
第6図	SD-01出土土器実測図	6	第12図	グリッド出土石器実測図	16

## 図 版 目 次

図版第一	北西部確認状態(上) 北東部確認状態(下)	図版第六	経塚土層断面(上) 経塚土層断面(下)
図版第二	北西部確認状態(上) 北東部確認状態(下)	図版第七	SD-01土器出土状況(上半) SD-01出土土器(下半)
図版第三	SD-01土層断面(上半) SD-02土層断面(下半)	図版第八	経塚出土五輪塔(上) 経塚出土五輪塔(下)
図版第四	経塚全景(北より)(上) 経塚全景(北東より)(下)	図版第九	グリッド出土土器(上) グリッド出土石器(下)
図版第五	経塚土層断面		

# I 調 査 経 過

## 1. 調査に至る経緯

平成元年6月6日夜、加藤幸雄町文化財調査委員より電話にて本遺跡にユンボが入り土取り工事が行われている旨の連絡が町教委文化財担当の佐藤氏にあった。6月7日、下田原地区に開発予定のゴルフ場内にある遺跡の取り扱いについて相談を受けた石川が社会教育課に出向くと、遺跡が壊されているので現地を確認してほしいと要請された。現地は県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡であることから、工事を中止して調査を行うことで町教委の方針が決定された。土地所有者で開発行為者でもある五月女氏に、登録遺跡であることと調査を行わなければならないことをご理解いただくため、石川を含めた町教委関係者が五月女氏宅を伺う。五月女氏にご理解を頂き工事は一時中止し、遺構の確認作業を行うことにする。午後、県教委文化課に町教委佐藤氏が出向き指導を受ける。県教委の指導は、遺構の確認調査を町が費用負担し行うというものであった。遺構が検出された場合には国庫補助を受ける方向で考えることになる。佐藤氏が町に戻り町役場内の打合せ、手続きをして6月8日より調査を行うことになる。調査は町にとって最初の例となり、調査担当に石川が当たることになった。

以下、調査体制を示すと下記の通りである。

〔事務局〕	(当時)	(現在)
教育長	飯村 良平	和田 實
社会教育課長	川島 英作	田中 伸明
同課長補佐	石川 明	斎藤 清美
同係長	高橋 容	斎藤 幸夫
同主事	佐藤 雅俊	石井 良枝
調査担当	石川 均	

## 2. 調査の方法

調査は、土器の分布が少量であったことや、工事を止めて遺構確認を行うことになったので全面の表土を取り除くことにした。しかも作業は短期間で行うことが要求されたために、機械力を用いることにした。表土の除去にはユンボを用いて行い、併行して人力による残土処理を進めた。表土処理は、黒色土を可能な限り残した。遺構確認作業もなるべく黒色土中で行うよう努力した。測量杭は、磁北を用いて任意点を決定し、基準とした。この基本杭は20m間隔で東西をアルファベット、南北を数字で表すことにした。

確認作業は北東部分から南西方向に進めた。確認作業が終了し、県教委文化課の指導により部分的な調査で良いという指示があった。このため本格的な調査は行われなかったこととなり、すべての費用も町が負担することになった。

遺構の確認作業で遺構らしい所が25ヶ所程検出された。それらを試し掘りした結果、2条の溝跡以

外は遺構として認定されなかった。この溝跡と古墳として登録されていた塚状のものを調査することにするが、塚は溝跡が埋まった後に盛土されていることが溝跡の調査で判明したので、機械力を用いて盛土を取り除くことにして調査は終了した。なお、溝跡の部分的な調査は1/20で記録した。遺構・遺物のグリッド内での確認状態は1/100で図にした。

### 3. 調査日誌抄

- 6月8日～6月10日 休憩所のテントを張る。重機による表土掘削と併行して人力による残土処理を行う。グリッド杭を設定する。
- 6月11日～6月14日 作業員による残土処理と遺構確認作業を行う。
- 6月15日～6月17日 15日より遺構確認の写真を撮影する。16日県教委文化課指導。溝跡（SD-01・02）の部分調査を始める。17日SD-01より坏出土する。
- 6月19日～6月24日 19日溝跡のセクション写真撮影。20日セクション図作成。21日塚の断割りを行う。五輪塔及び経石が出土する。22日・23日塚のセクション図作成。セクション写真撮影を行う。
- 6月25日 遺跡東端部の地層断面図を作成して調査を終了する。

## Ⅱ 地理的・歴史的環境

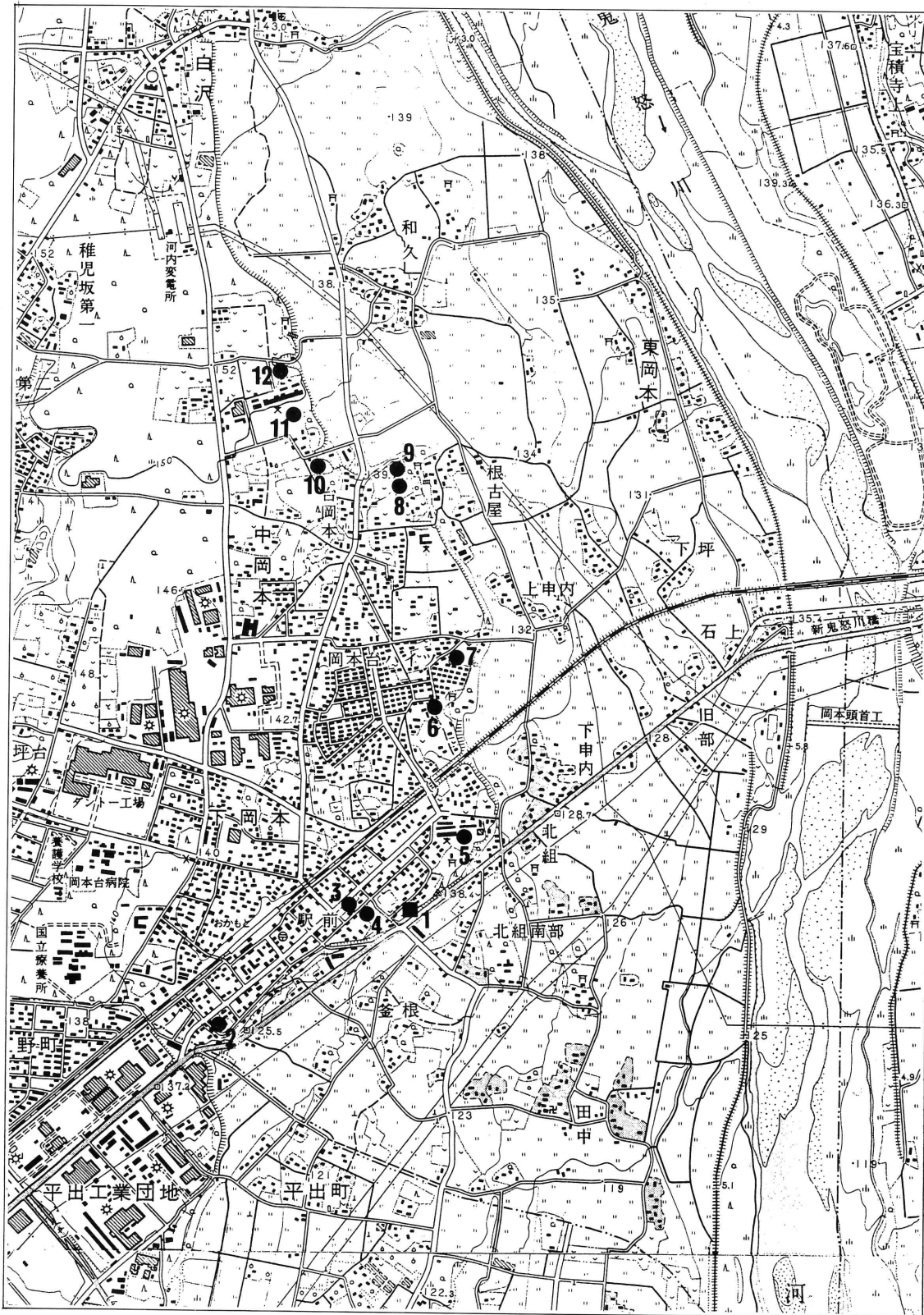
### 1. 地理的環境（第1図）

河内町は、栃木県の中央部を南流している鬼怒川の右岸に位置する。本町の面積は47.72km<sup>2</sup>である。現在の行政区画では北を上河内町、東を氏家町と高根沢町および宇都宮市、南部および西部は宇都宮市と接する。本町の東西の距離は9.2km、南北は9.8kmで台形状を示す。

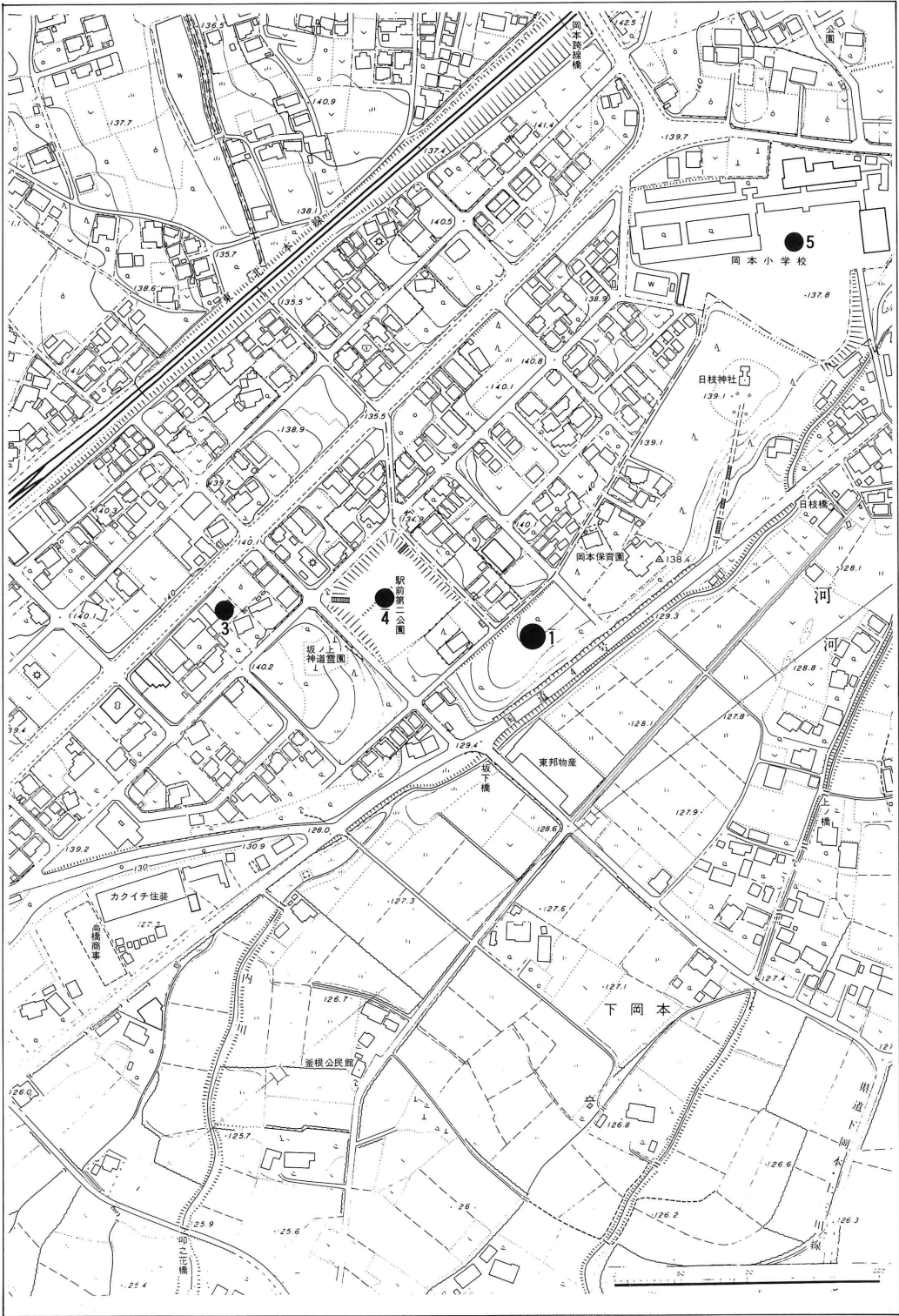
河内町の地形は、東部に広がる鬼怒川の沖積地と岡本台地、西部の宇都宮丘陵、および中央部の田原台地に区分される。河川は、町西部の宇都宮丘陵の裾を南流する山田川と、中央部の宝木台地と田原台地の境を流れる御用川がある。この二つの川は北から南に流れ田川に流入する。田川は茨城県結城市で鬼怒川に合流する。町域内の宇都宮丘陵北端に位置する笠松山の標高は327.8mで、丘陵南部の塚原では215mである。

日枝神社南遺跡は鬼怒川右岸の岡本台地上に位置する。標高約138mの北東から南西に傾斜する台地上にある。遺跡の南西端には台地を開析する谷が入り込んでいる。東側の沖積面と台地上との比高は約10mである。日枝神社南遺跡は河内町大字下岡本4017番地にある。遺跡から岡本駅まで約700m、東の鬼怒川までは約1.4kmである。

### 2. 歴史的環境（第1・2図）



第1図 周辺の遺跡分布図



第2図 周辺の地形及び遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概要	備考
1	日枝神社南遺跡	大字下岡本	先土器（チョッパー・フレイク出土）	消滅
2	第一公園東遺跡	大字下岡本	縄文（中期）散布地	消滅
3	第二公園南遺跡	大字下岡本	縄文（加曽利E）散布地	消滅
4	第二公園内古墳群	大字下岡本	円墳（？）2基	消滅
5	岡本小学校遺跡	大字下岡本	縄文（後期）散布地	消滅
6	日吉神社西遺跡	大字中岡本	縄文・土師散布地	消滅
7	日吉神社北遺跡	大字中岡本	縄文（加曽利E）・土師散布地	消滅
8	岡本城跡	大字中岡本	鎌倉～室町	町指定
9	岡本城内遺跡	大字中岡本	土師散布地	
10	寺山遺跡	大字中岡本	寺院跡（南北朝～室町）	
11	古里中学校遺跡	大字中岡本	縄文（堀之内）散布地	消滅
12	古里中学校北遺跡	大字中岡本	土師散布地	

日枝神社南遺跡の所在する河内町大字下岡本地区は段丘縁に遺跡が集中するようである。本町内には現在までに52ヶ所の遺跡が確認されている。詳細な分布調査が行われていないので、この3倍程はあるものと思われる。先土器時代の遺跡は本遺跡のみであるが、立地的には調査が進めば他にも発見される可能性がある。縄文時代の遺跡は16遺跡が確認され、5遺跡が本遺跡と同じ鬼怒川右岸段丘縁辺部で、他の11遺跡は西部の宇都宮丘陵上にある。3年程前に宇都宮丘陵を踏査する機会があったが丘陵頂部の平坦部は遺跡となる場合が多く、遺跡の時期は縄文早・前期のようである。町内の縄文時代の遺跡は中期が多い。弥生時代の遺跡は未発見であるが調査が進めば必ず発見されると思われる。古墳は6古墳群（13基）確認されている。今回の調査で日枝神社南古墳が古墳ではなく経塚であったことが判明し、近接した第二公園内古墳群（円墳2基）も古墳ではなかった可能性が高い。そうすると河内町における古墳分布は田原地区の宇都宮丘陵上か、このすぐ東下の田原台地上あるいは中央部の田原台地上ということになる。このことは宇都宮周辺の田川流域における古墳の変遷から、六世紀の第Ⅱ四半期を過ぎると宇都宮南部から宇都宮北部に首長権が移り、河内町の田原地区もこの首長の翼下に入ったことを示す。このように古墳時代の河内町は、宇都宮北部古墳群の影響を受けて開花したのであろう。奈良～平安時代の集落は宇都宮丘陵の山麓あるいは岡本台地上に分布する。

以上のように河内町の遺跡は、都市化の波を受けて調査されないまま消滅したものが多い。このことから各時代の様子が鮮明にならない。今までに町の遺跡をまとめた『河内町誌』にも土器の資料や遺跡の場所が明確に示されていない。今回、本報告をまとめるにあたり、今のうちに詳細な分布調査を行い、遺跡の保護に努めなければならないことを痛感した。

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

日枝神社南遺跡および日枝神社南古墳の今回の調査は面積約2,300 $km^2$ である。確認調査で検出された遺構は溝跡6条、不整形落ち込み20ヶ所、高塚状高まり部1カ所であった。このうち試掘を行った結果、遺構として調査を行う必要があると思われたものは溝跡2条（SD-01・02）と高塚状高まり部1カ所であった。以下、溝跡、経塚（高塚状高まり部）としてこの順に記載し報告する。

#### 1. SD-01と出土遺物

SD-01（第4・5図）

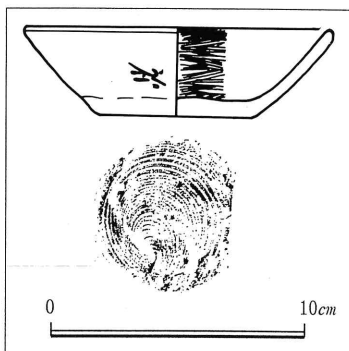
SD-01は調査区の北東から南西にかけて検出された溝跡である。この溝跡は台地縁辺と併行している。また、本溝跡の北西約9mに検出された溝跡SD-02ともやはり併行する。総延長約71mに亘って確認されたが、調査を行った部分は幅1m程のトレンチが4カ所であった。SP1・2の標高が138.10m、SP7・8が136.50mである。

SP1・2のトレンチでは、溝の上端幅が2.35m、下端幅0.67m、深さ1.24mである。覆土は、黒褐色を示す黒色土で今市粒や七本桜粒・ローム粒・白色軽石などを含む。堆積状態は自然に堆積している。出土遺物はない。

SP3・4のトレンチでは、溝の上端幅1.62m、下端幅0.98m、深さ0.46mである。覆土は、黒色土を主体とする黒褐色土で今市粒・七本桜粒・ローム粒・白色軽石などを含む。堆積状態は自然に堆積している。出土遺物はない。

SP5・6のトレンチでは、溝の上端幅1.90m、下端幅0.76m、深さ0.99mである。覆土は、下端近くの壁際にロームブロックやローム粒を主体とする黄褐色土や黒色土とローム粒を主体とする黄褐色土が堆積している。その後の底にローム粒と黒色土を主体とする黄褐色土、さらに黒色土を主体とする黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物は土師器坏形土器1点が上層より出土している。

SP7・8のトレンチでは、溝の上端幅2.36m、下端幅0.79m、深さ1.09mである。覆土は、ローム粒・黒色土を主体とする黄褐色土やローム粒を主体とする黄褐色土が下層に堆積し、上層には黒色土を主体とする黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物はない。

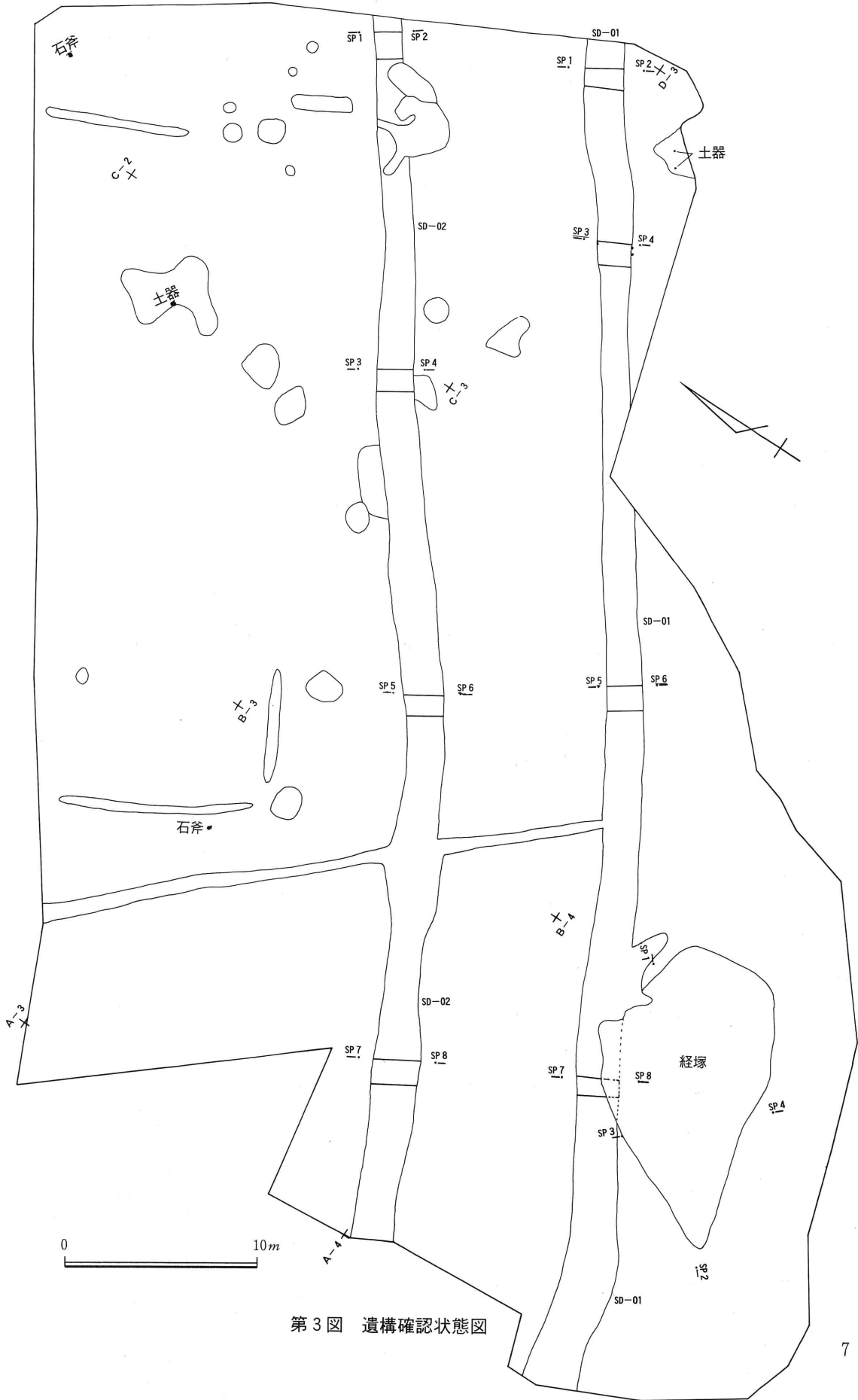


第6図 SD-01出土土器実測図

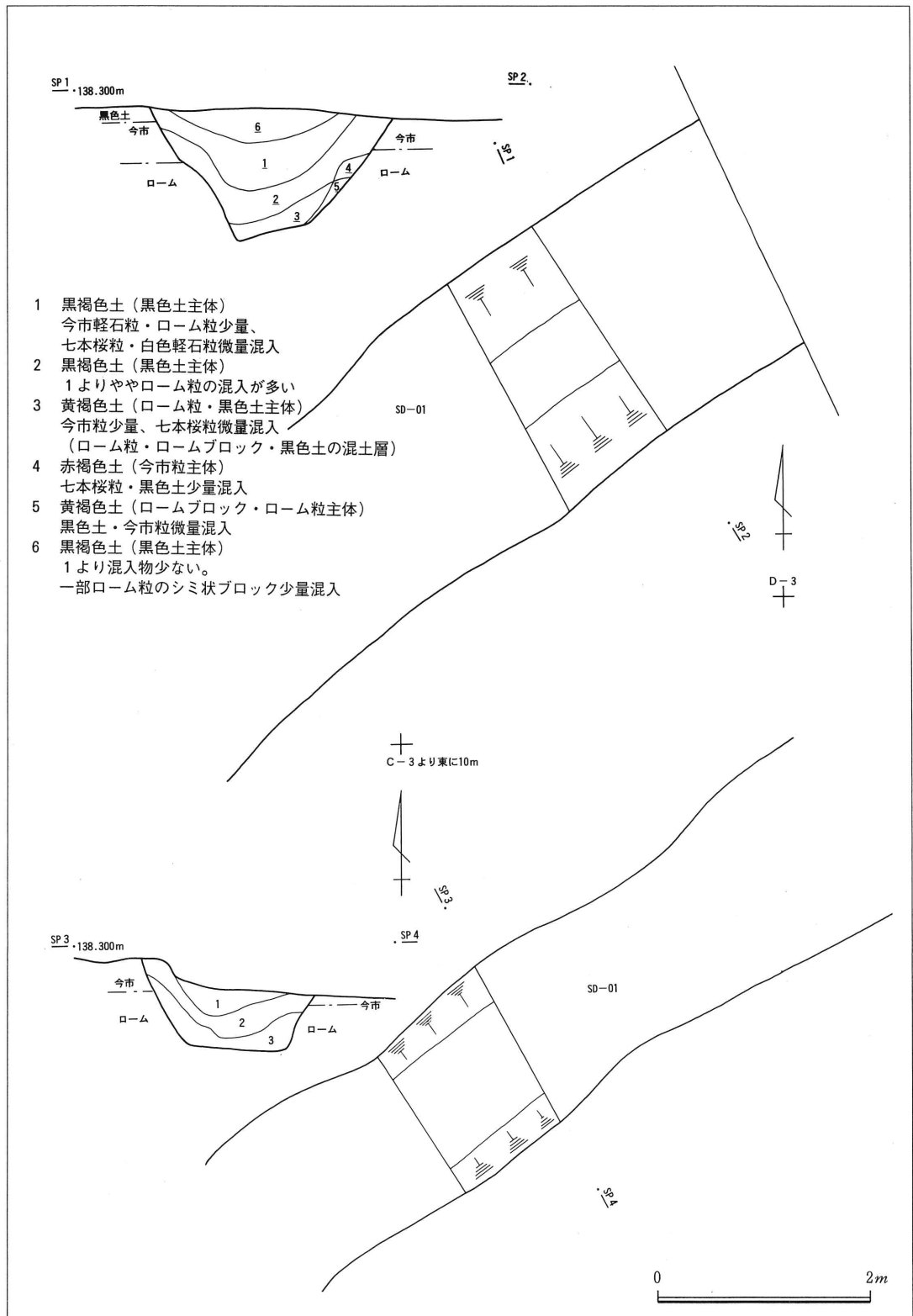
出土遺物（第6図）

遺物はSP5・6トレンチ北壁際で確認面から24cm下の層より土師器坏形土器1点が出土した。底面を上に出土している。ほぼ完形に近い。器高3.6cm、口径12.2cm、底径6.2cmを測る。口縁部が直線的に開く。内面は黒色処理を施す。内部体部は横方向のこまかいヘラミガキを、内面底部にも横方向のこまかいヘラミガキを行っている。外面はロクロ目が僅かに残るナデ仕上げを行っている。体部外面最下部はヘラ削りの後にナデ仕上げを行っている。

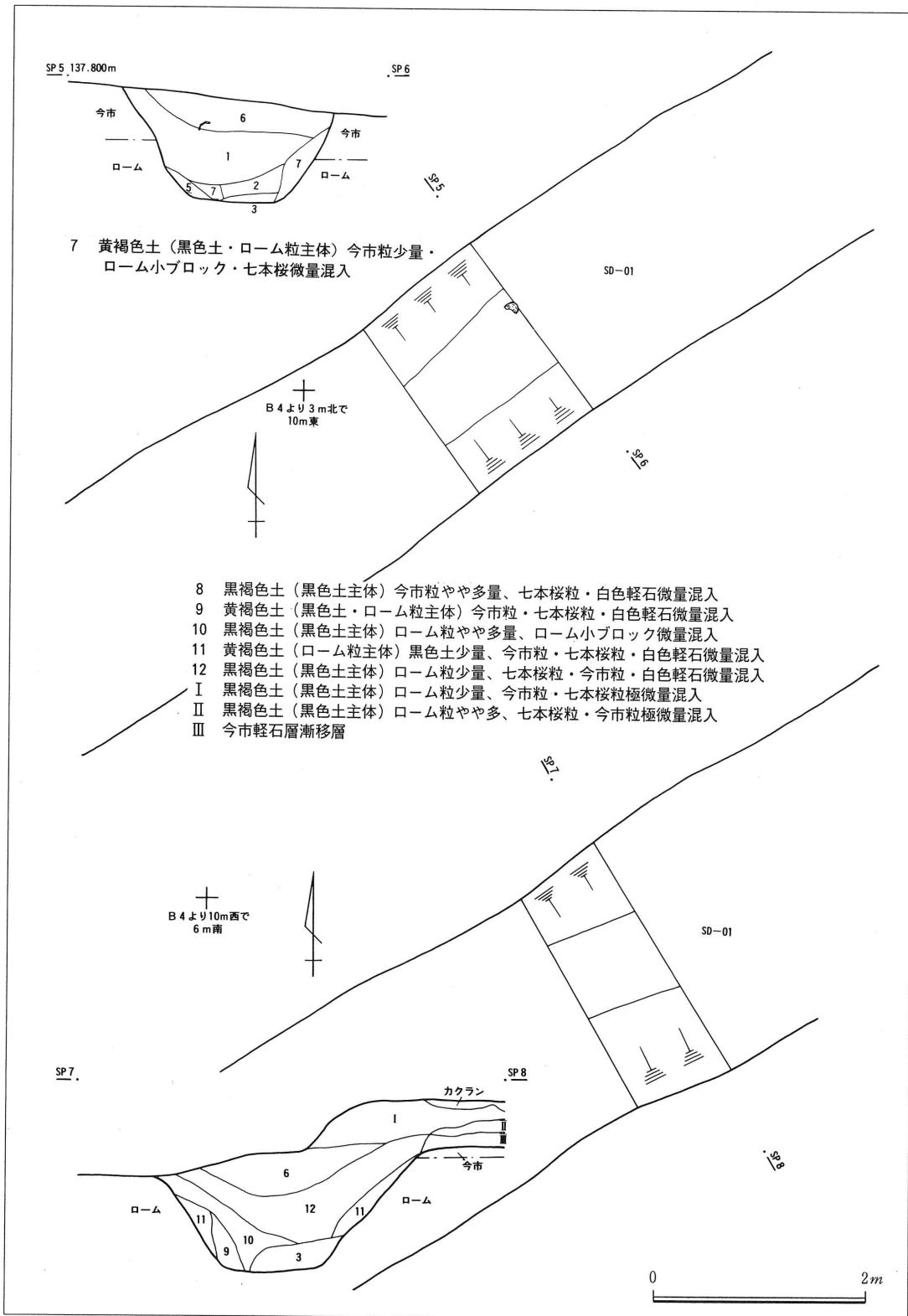




第3図 遺構確認状態図



第4図 SD-01実測図（1）



第5図 SD-01実測図(2)

るようである。底部には糸切り痕が明瞭に残っている。体部外面には墨書で文字が横書きされている。文字の右半が剥離しており解読できないが、「ネ」偏の可能性がある。

## 2. SD-02と出土遺物

SD-02 (第7・8図)

SD-02はSD-01の南東約9mに並行するように位置する。64mに渡って確認されたが調査を行った部分は幅1m程のトレンチが4ヶ所であった。SP1・2の標高が138.45m、SP7・8が135.74mである。

SP1・2のトレンチでは、溝の上端幅1.95m、下端幅1.03m、深さ0.40mである。覆土は底にローム粒・黒色土主体の黄褐色土があり、その上には黒色土主体の黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物はない。

SP3・4のトレンチでは、溝の上端幅2.03m、下端幅0.92m、深さ0.67mである。覆土は底にローム粒・黒色土主体の黄褐色土があり、その上に黒色土主体の黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物はない。

SP5・6のトレンチでは、溝の上端幅2.12m、下端幅0.98m、深さ0.86mである。覆土は底に黒色土とローム粒を主体の黄褐色土があり、その上には黒色土主体の黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物はない。

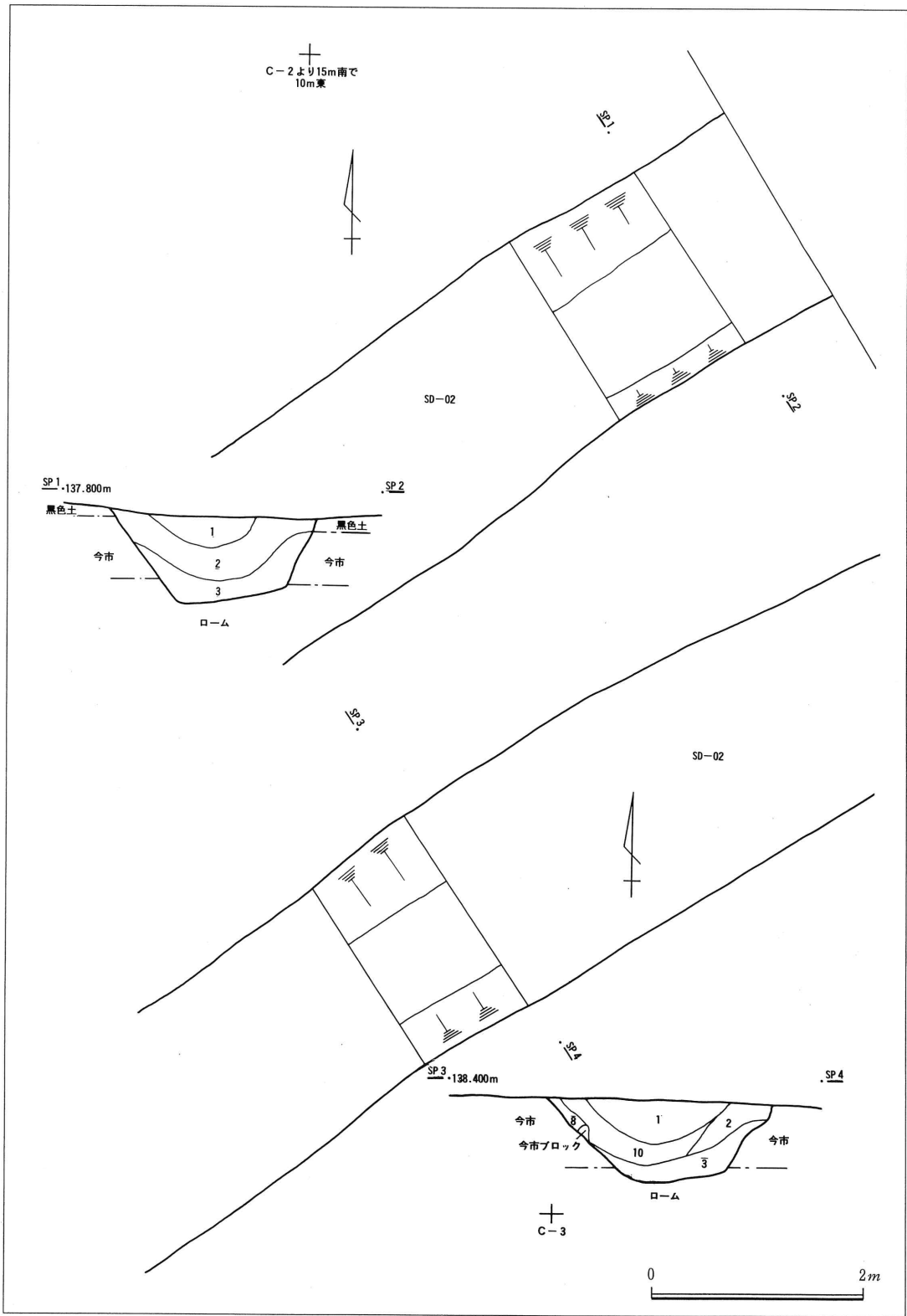
SP7・8のトレンチでは、溝の上端幅2.45m、下端幅0.65m、深さ0.77mである。覆土は黒色土主体の黒褐色土が自然に堆積している。出土遺物はない。

## 3. 経塚と出土遺物

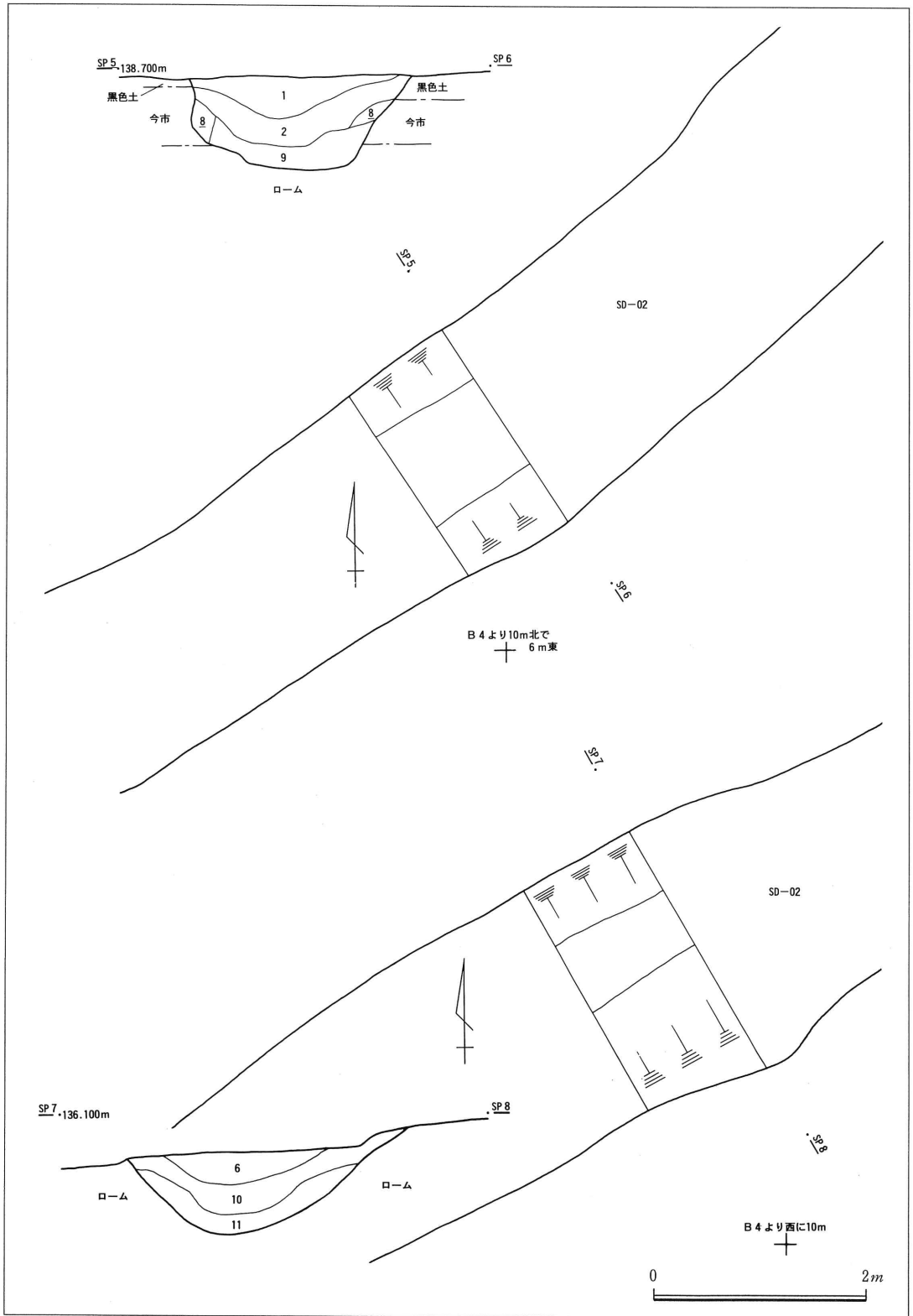
経塚 (第9図)

経塚はSD-01の南西端部付近に位置する。岡本台地とこれを開析する谷の上端が合わさるような所に立地している。長軸15.7m、短軸9.2mの長楕円形を示す。高さは1.26mである。調査前には古墳として登録されていたが、SD-01のSP-7・8の調査により本塚の盛土がSD-01の上面を覆っていることから溝より新しいことが判明し、古墳ではないらしいということになった。盛土の状況や塚の覆土中に埋納されたものがあるかもしれないということで機械力により盛土を取り除くことにした。その結果、覆土から長軸3cm程の小石が多数出土した。このことからこれは経石であり、塚は経塚であると推察した。なお、五輪塔も出土した。

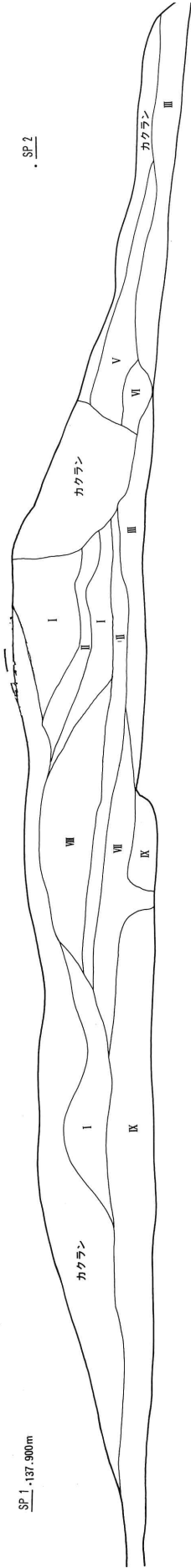
経塚の盛土は黒色土主体の黒褐色土でローム粒がブロック状にまとまった土の混入量の違いか、今市粒・七本桜粒の混入量によって土層が区分された。経塚の下には今市層に漸移する層(Ⅲ・Ⅳ層)が残っている。



第7図 SD-02実測図(1)



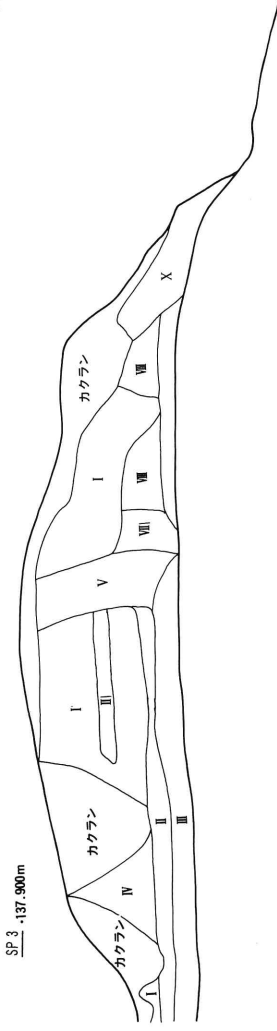
第 8 図 SD-02実測図 ( 2 )



SP 1 137.900m

SP 2

SP 4



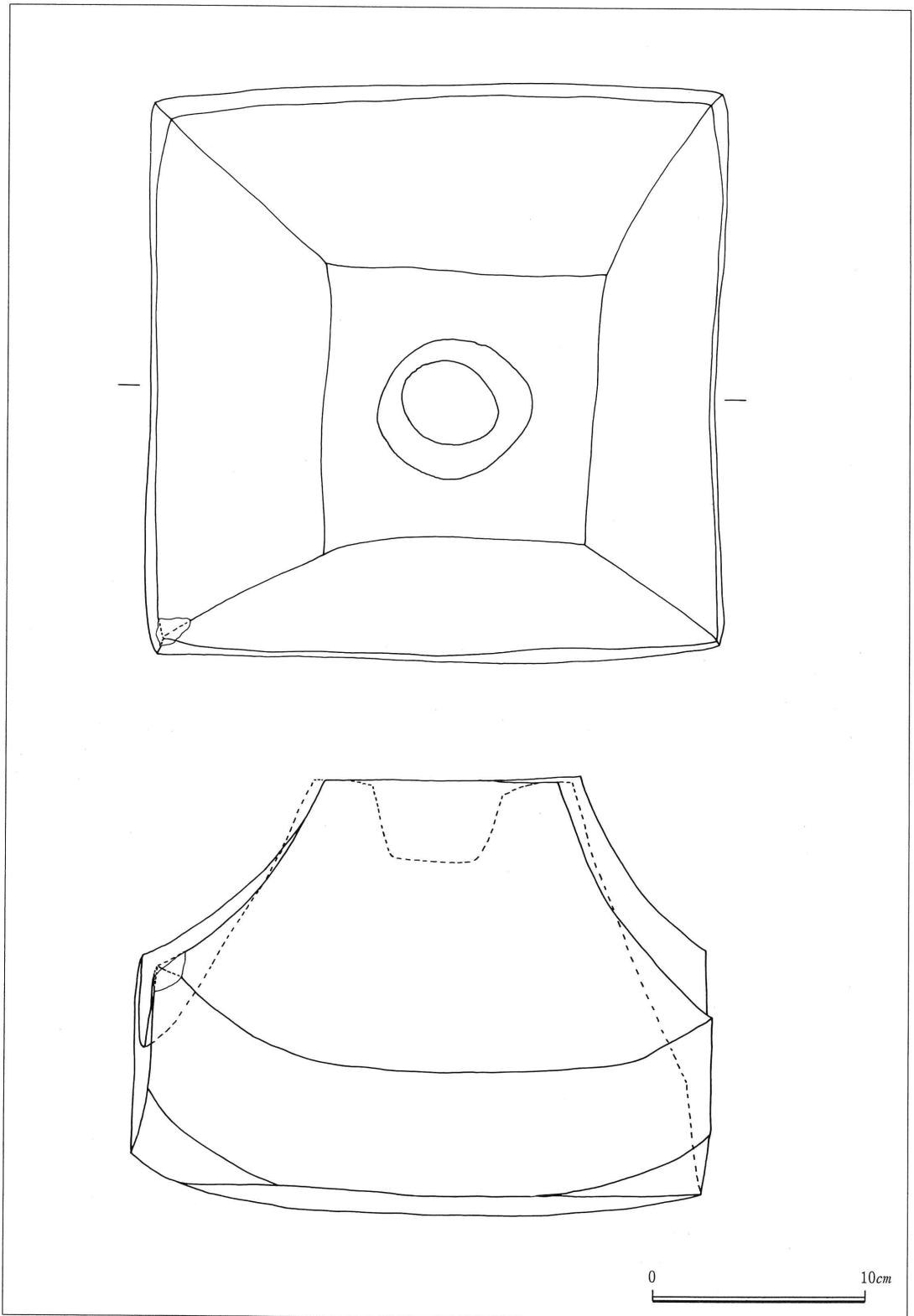
SP 2 137.900m

- I 黒褐色土 (黒色土主体) ロームブロック多量、ローム粒少量、七本桜粒・今市粒・灰白色軽石微量混入 (やや軟らかい)
- II 黒褐色土 (黒色土主体) ロームブロック多量、ローム粒少量、今市粒・七本桜粒極微量混入 (硬い)
- III 今市漸移層
- IV 黒褐色土 (黒色土主体) ローム粒少量、ロームブロック微量、今市・七本桜粒・灰白色軽石極微量混入
- V 黒褐色土 (黒色土主体) ローム粒・ロームブロックやや多量、今市・七本桜粒・灰白色軽石極微量混入
- VI 黒褐色土 (黒色土主体) 今市・七本桜粒少量、灰白色軽石極微量混入 (やや軟らかい)
- VII 黒褐色土 (黒色土主体) 今市・七本桜粒少量、灰白色軽石極微量混入 (硬い)
- VIII 黒褐色土 (黒色土主体) 今市粒やや多量・七本桜粒少量、灰白色軽石極微量混入
- IX 今市漸移層
- X 赤褐色土 (今市粒・黒色土主体) 七本桜粒・灰白色軽石微量混入



第9図 経塚セクション図





第10図 五輪塔実測図

## 出土遺物（第10図）

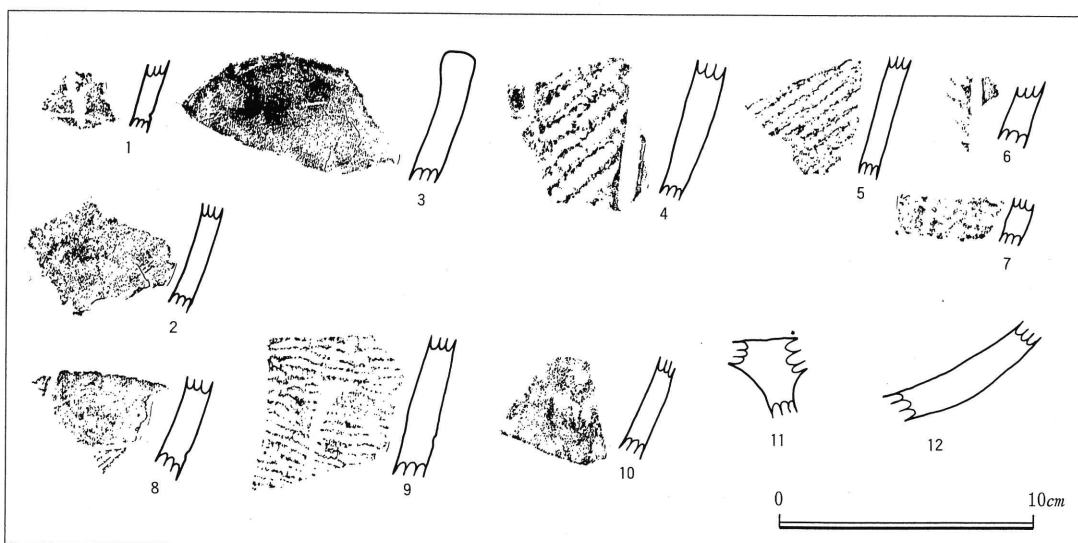
五輪塔のうちの火輪を表す三角の部分である。屋根を思わせるような形を示す。寄棟状に稜が四方に広がるがその中心は僅かにずれる。稜の先は反りを持っている。上面の中央には径6cmほどで深さ3.5cmの円形の窪みがある。これは風輪を受け入れるものである。高さ20.7cm、長辺28.6cm、短辺27.2cmの石製である。

## 4. グリッド出土遺物

### 土器（第11図）

ここに示した土器片は確認作業中に検出された土器片である。したがって遺構と直接結びつかない資料である。

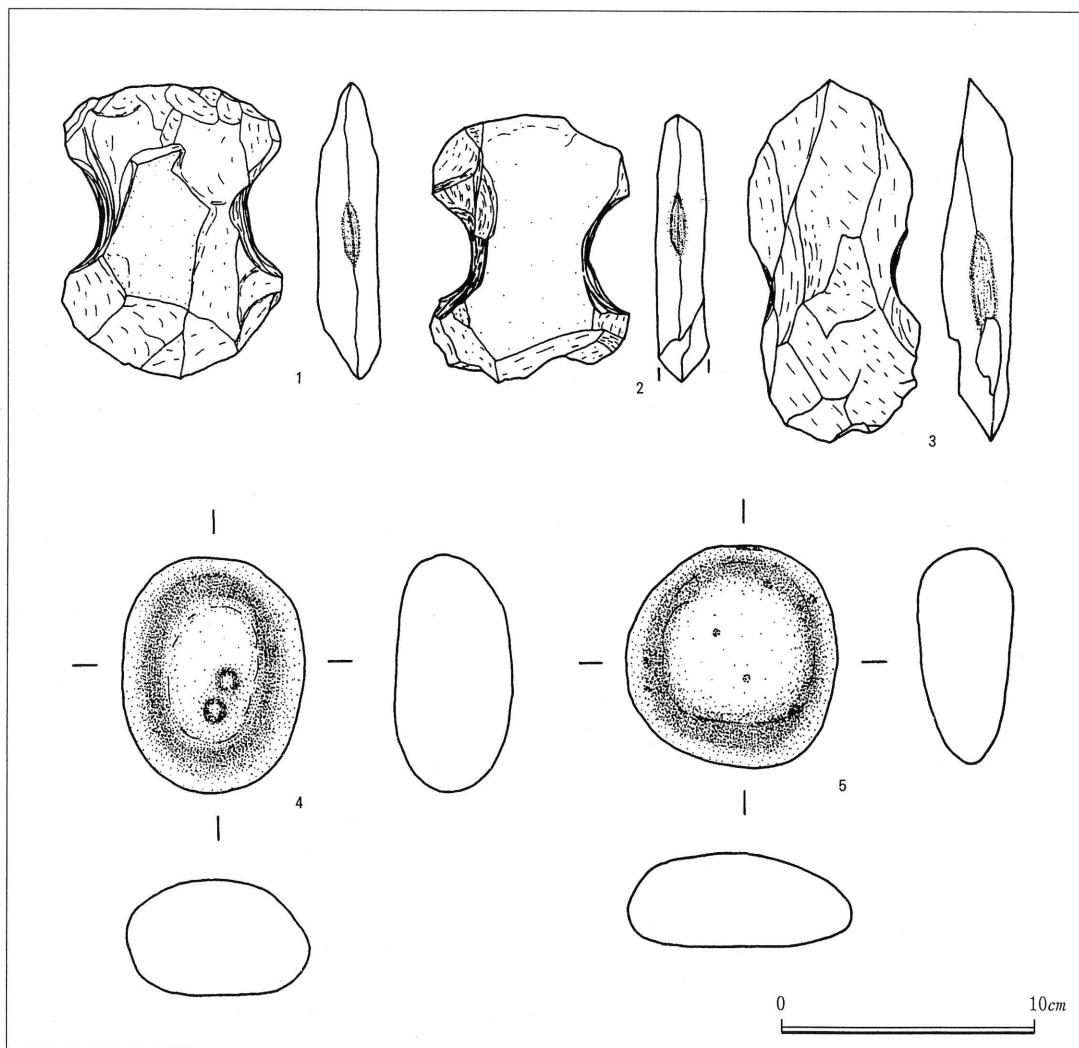
1は、横方向に沈線が一条引かれている他は無文である。砂粒をやや多量含む。焼成は良好である。内外面共明茶色を示す。2は、無文の土器で砂粒を多量含む。長石・黒雲母末を少量含む。焼成は良好である。外面は黒色および暗灰色、内面は暗灰色を示す。3は、無文で波状口縁部の小片である。内外面共に良くナデ付けを行っている。砂粒をやや多量含む。長石・黒雲母末を少量含む。焼成は良好である。内外面共に暗茶色を示し、外面の一部に炭化物が付着している。4は、タテ方向に太い沈線を引き、沈線間には縄文が施してある。縄文を先に施してから沈線を引いている。砂粒をやや多量含む。焼成は良好である。内外面共に黄褐色を示す。5は、全面に縄文が施してある。内面は良くナデ付けられている。砂粒をやや多量含む。焼成は良好である。内外面共に赤茶色を示す。6は、タテ方向の沈繩と縄文が施されるものと思われるが小片のため良く判らない。砂粒をやや多量含む。焼成は良好である。内面は黒色、外面は赤茶色を示す。7は、器面の荒れが著しく良く判らないが縄文が施されているものと思う。砂粒を少量含む。焼成は良好である。内面は黒色、外面は明茶色を示す。



第11図 グリッド出土土器実測図

8は、左上から右下にカーブを描く沈線が引かれている。右下の部分に細かい縄文が施されている。無文の部分と内面は良くナデ付けられている。砂粒を少量含む。焼成は良好である。内面は暗褐色、外面は明茶色と焼成の時のイブレによる黒色である。9は、全面に縄文が施されている。砂粒を少量含む。焼成は良好である。内面は明茶色、外面は暗茶色で炭化物が付着している。10は、無文で砂粒を少量含む。焼成は良好である。内面は黒褐色、外面は明茶色を示す。11は、高坏の小破片である。坏部の内面はミガキを施している。外面にもミガキが施されているが、外面は内面ほど良く行われていない。脚部内面は指頭によるナデ付けを行っている。砂粒を多量含む。焼成は良好である。坏部内面が黒色、他は黄褐色を示す。12は、11の高坏坏部片と思われる。内外面共にミガキを施すが外面は粗い。砂粒を多量含む。焼成は良好である。内外面共に明黄褐色を示す。

1～10は縄文時代中期、11・12は古墳時代後期と思われる。



第12図 グリッド出土石器実測図

## 石器（第12図）

図示した石器は確認作業中に検出されたもので、直接遺構と結びつくものではない。

1は、分銅形の打製石斧で上の刃部は円刃状であるが下は尖り気味である。両面共に自然面を残している。石材は砂岩である。長さ12.4cm、幅6.3cm、厚さ2.7cm、重量336.5gである。

2も分銅形の打製石斧で上の刃部は円刃状であるが、下は欠損している。両面共に自然面を残している。石材は砂岩である。現存の長さ11.3cm、幅8.5cm、厚さ2.0cm、重量264gである。

3も分銅形の打製石斧であるが刃部が尖っている。片面に自然面を残している。石材は粘板岩である。長さ15.3cm、幅7.0cm、厚さ3.0cm、重量369gである。

4は、磨石で長さ9.9cm、幅7.7cm、厚さ5.0cm、重量524gである。石材は砂岩である。磨石兼敲石であり、敲いた跡が両面に残っている。

5は、磨石で長さ9.0cm、幅9.5cm、厚さ4.1cm、重量461.5gである。石材は安山岩である。磨石兼敲石であり、敲いた跡が片面に残っている。

## Ⅳ ま と め

本遺跡は、今まで縄文時代の遺跡および円墳として周知されていた。調査は開発行為に伴う伐根により縄文土器片と石器の出土を研究者が発見し、町文化財調査委員に連絡したことによる。

当初の踏査による予想では縄文時代の住居跡が検出される可能性があった。しかし、調査地域内からは住居跡は検出されなかった。土器片の出土や石器の出土から付近に生活に伴う住居跡や土坑などの遺構がある可能性は高い。しかし周辺部のほとんどはすでに住宅地などに開発されてしまっている。

このような状況で今回の調査によってもたらされたごく少量の遺物から遺跡の様子を明らかにすることは不可能である。しかし、このごく一部の手掛かりから縄文時代の中期から後期の時期に付近に住居を構えて活動した縄文人がいたことが明らかになった。このことが今回の調査の成果の一つである。

また、円墳として周知されていた高まりをもった丘が古墳ではなく経塚であったことも明確になった。この経塚は溝状遺構の上に盛土していることが判ったので溝状遺構の年代よりも新しいことが確定した。そして盛土中から五輪塔の一部が出土したことから、ある程度の年代を考える手掛かりが得られた。五輪塔のうちの火輪を示す三角形の形状から年代を考えると、屋根状の端部に反りがかなり認められることから鎌倉時代や室町時代のものではないことが判る。おそらく江戸時代の新しい頃のものと思われる。このような時代に生きた人々の精神生活を知る一部の資料を得たことになる。

その他に検出された遺構は溝状遺構である。溝状遺構は2条の溝が間隔7.9m～8.3mで並行するように検出された。東側のSD-01より内黒の坏形土器が出土している。この土器の出土層は最後に埋まった黒褐色土の層からであり、溝としての機能が終わってから捨てられた土器のようである。土器

の年代は9世紀の終末と考えることが出来る。2条の溝は覆土の状況からほぼ同年代の時期としてよいと思われる。この溝状遺構の性格については、調査によって得られた資料があまりないことから現時点では不明である。南那須町内で検出された東山道の跡と考えられる遺跡を調査担当された中山晋氏は2条の溝が並行することや、南那須町内の東山道の延長線上に本遺跡があたることなどから本遺跡も東山道の可能性が高いと考えている。これを受けて歴史学や地理学の一部の先生方も東山道の可能性が高いと云われている。しかし調査担当者としては、道路の路面に当たる部分に硬化面が全く検出されなかったことからこの遺構を道路跡として認定することはできない。もっとも担当者の認定の誤りや、調査の不備がまったくないとも言いきれないことも明らかにしておかなければならない。

調査の所見によると北端部より南端部の方が溝間が狭まること、前記したような硬化面がまったく認められなかったことから道路跡とすることはできない。溝間が狭まったり広がったりする場合においても、道路として認められた例があるのであれば、未使用の道路と考えることは出来る。その場合においても南端部は段丘を開析する谷を渡るようになるのであり、地形的にも無理があるように思われる。約30mで10m登るような傾斜を持つ道路となってしまうのである。以上のような疑問を満たす事例があるのかもしれないし、今後そういう事例が出るかもしれないので現時点ではこの溝跡の性格は不明な点が多いのである。

今回の調査は、調査としては不十分な調査となってしまった。担当者としては大いに反省しなければならぬ。部分的な調査にしてしまったという反省点は大きい。全部掘れば判るのかという意見もあるが、全部掘らなければ判らないし、掘ってもどうしても判らない場合もあるのが発掘調査なのではないかと思う。町にとって初めての調査・報告がこのような内容になってしまい残念である。これからはしっかりした調査体制を備えて発掘調査や報告書作成にあたっていきいたいし、町もそのような対応が取れる環境を整えていただきたいと思います。最後に希望を述べ、まとめとします。

(平成4年8月 脱稿)

# 版 圖



北西部確認状態



北東部確認状態

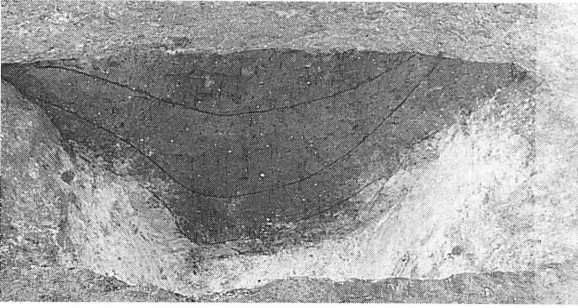




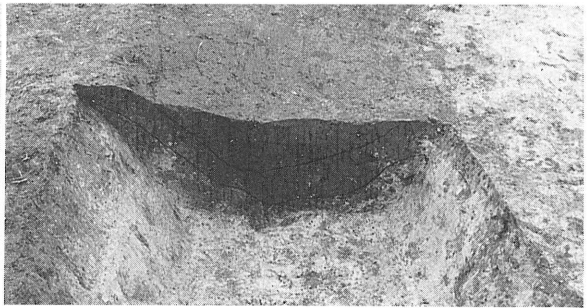
北西部確認状態



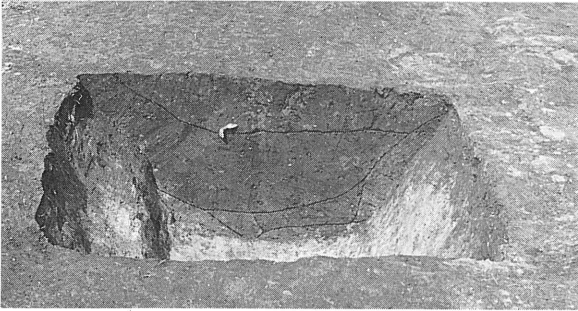
北東部確認状態



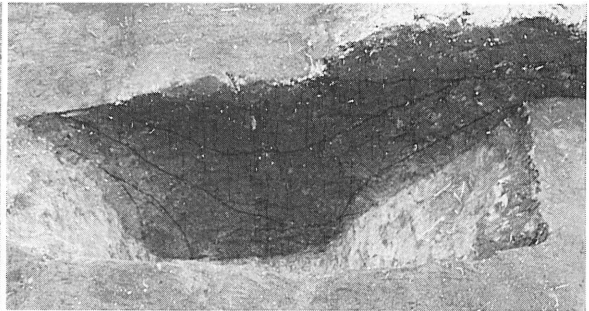
SD-01 SP 1~2 土層断面



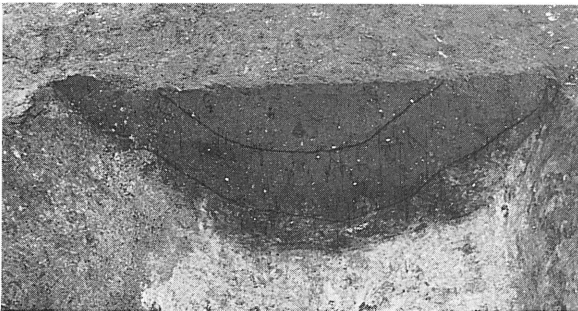
SD-01 SP 3~4 土層断面



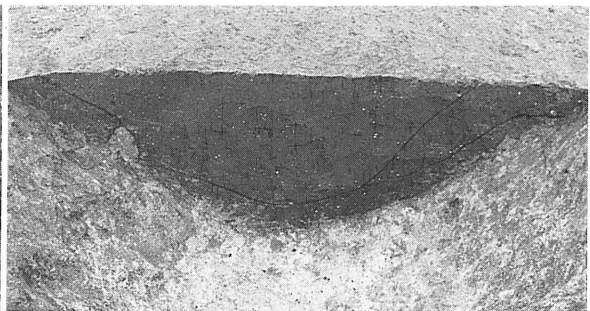
SD-01 SP 5~6 土層断面



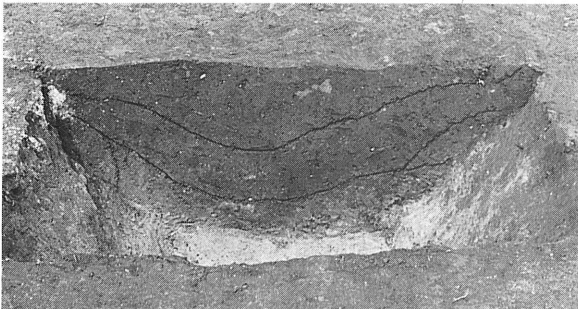
SD-01 SP 7~8 土層断面



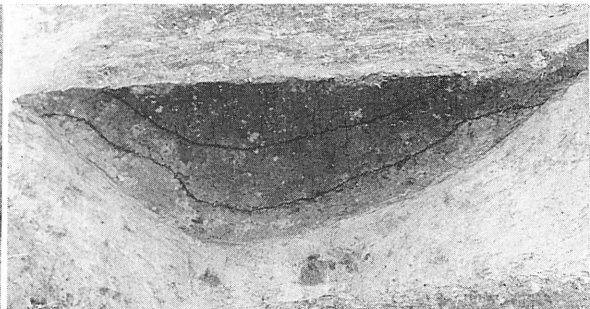
SD-02 SP 1~2 土層断面



SD-02 SP 3~4 土層断面



SD-02 SP 5~6 土層断面



SD-02 SP 7~8 土層断面





経塚全景（北より）



経塚全景（北東より）



経塚土層断面

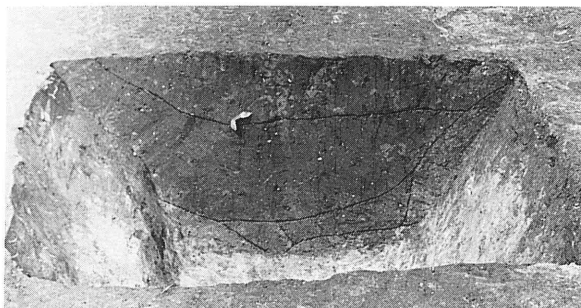


経塚土層断面



経塚土層断面

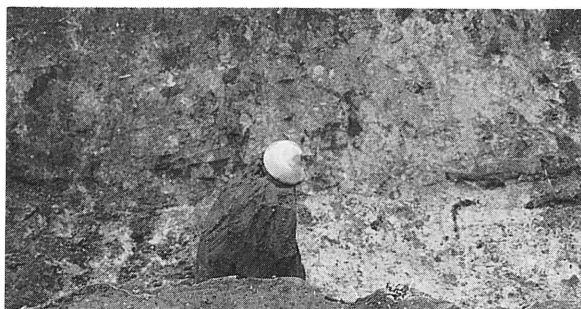




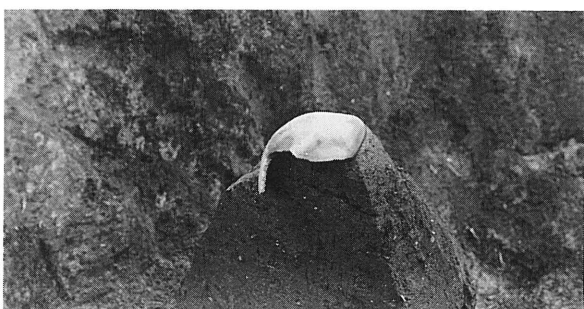
SD-01 土器出土状況



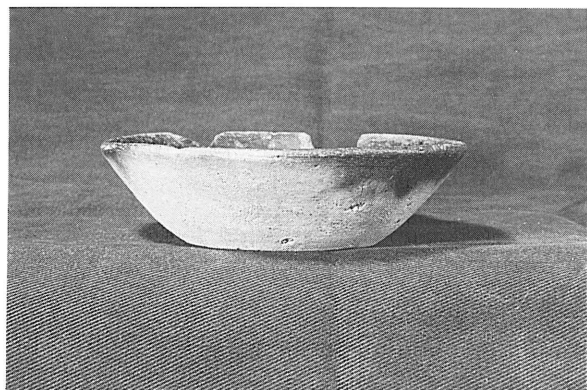
SD-01 土器出土状況



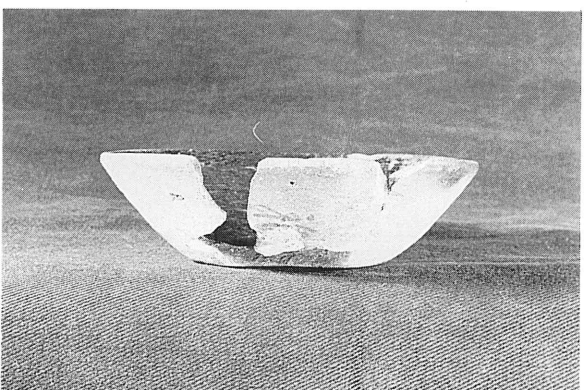
SD-01 土器出土状況



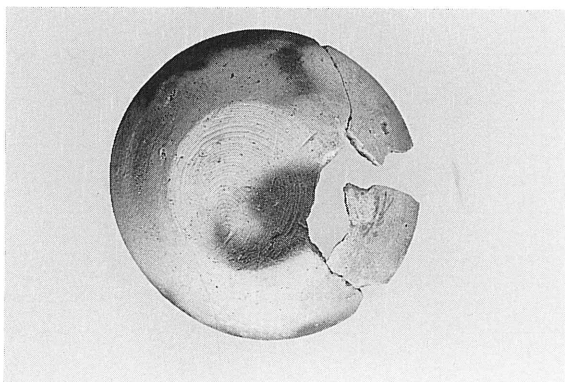
SD-01 土器出土状況



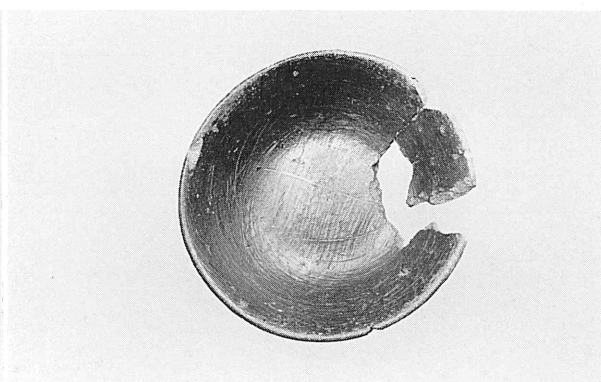
SD-01 出土土器



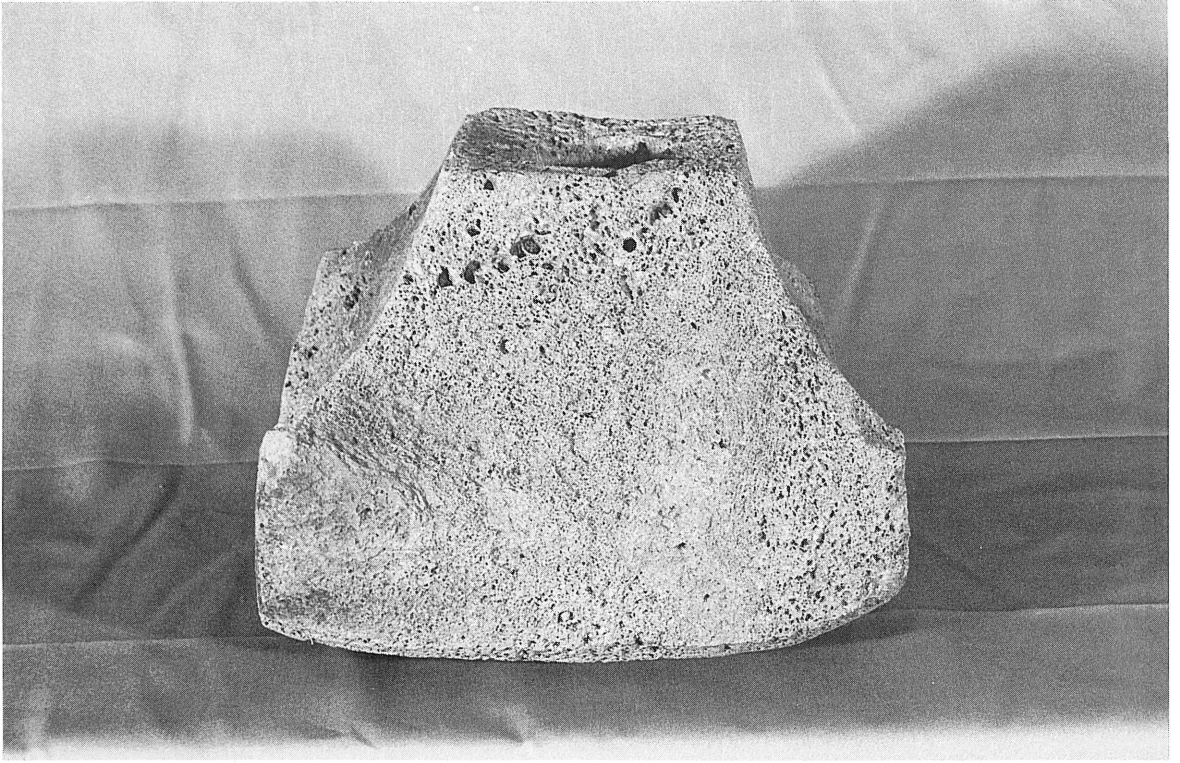
SD-01 出土土器



SD-01 出土土器内面



SD-01 出土土器底面

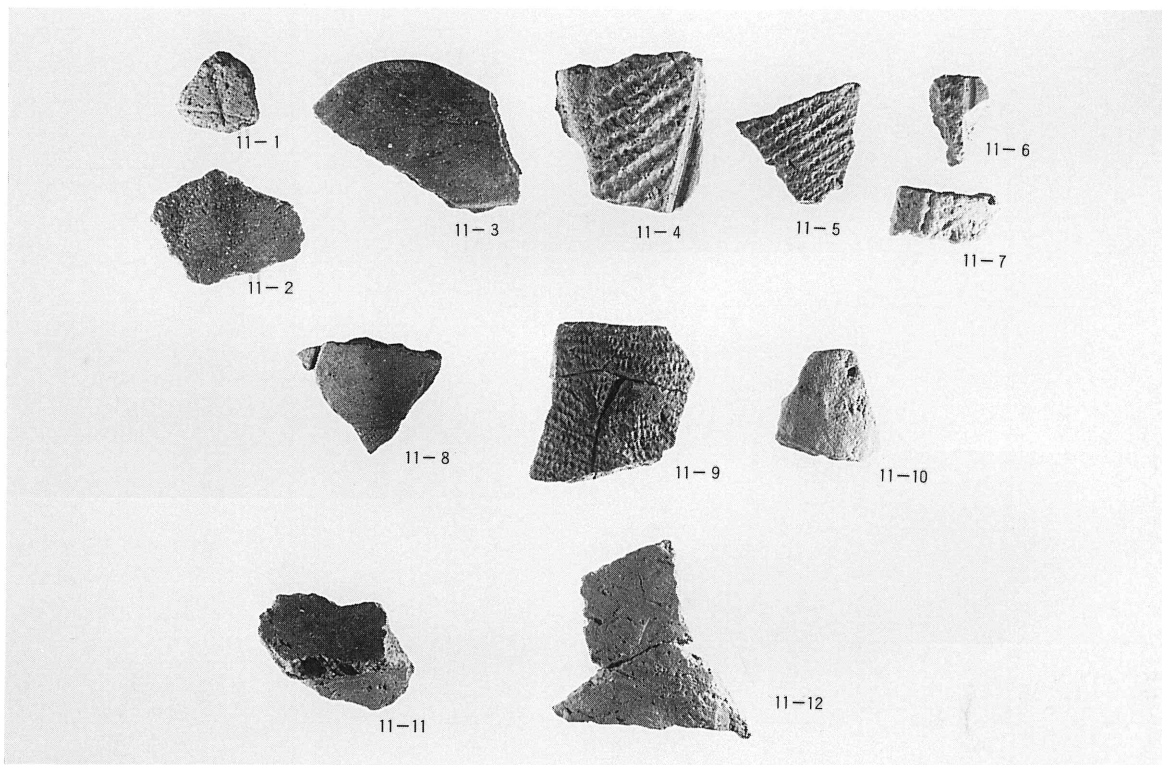


経塚出土五輪塔

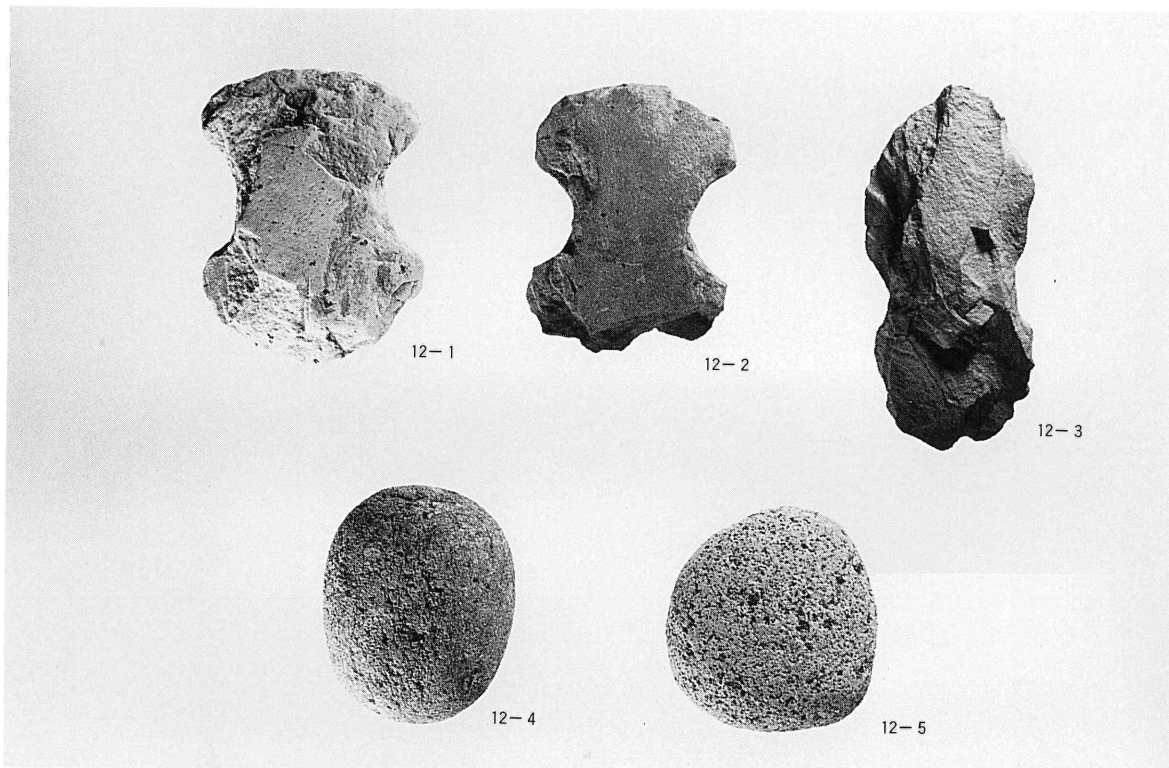


経塚出土五輪塔





グリッド出土土器



グリッド出土石器

河内町埋蔵文化財調査報告書第1集

**日枝神社南遺跡・日枝神社南古墳発掘調査報告書**

平成9年9月30日発行

発行所 河内町教育委員会  
〒329-11 栃木県河内郡河内町白沢500番地  
電話 028-673-0800  
印刷 (有) 丸谷印刷所